

服をめぐる

一人一品

記者 行司 千絵

衣服の研究現場より



TAKE FREE

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI) 広報誌

18

2021.12

服をめぐる 18

一人一品

記者×KCI収蔵品

行司千絵「ふぞろいの針目」 p4

KCI Wunderkammer

サンダル p12

地産街道を行く

京都市染色ものがたり① p14

今日の補修室 第18回

補修室の七つ道具③ p20

インタビュー

ファッション関係者に聞く、

「コロナ禍で考えたこと。これからのこと。」 p22

お知らせ p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「ドレス・コード? — 着る人たちのゲーム」展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展、「モードのジャポニスム」展など)や、研究誌(『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』)の発行を通じて公開しています。 Website <https://www.kci.or.jp/>



「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」(熊本市現代美術館 2019年)山中慎太郎(Qsyum!)撮影

表紙の収蔵品



『フィエ・ダール (Feuillets d'art)』誌より

出版社: Feuillets d'art
発行年: 1919年
発行地: パリ

『フィエ・ダール』誌は1919年に編集者リュシアン・ポーゼルによって創刊された、毎月1500部限定の豪華な芸術誌。1922年まで不定期に発刊された。美術、演劇、文学、ファッションなど幅広い芸術ジャンルをカバーし、ジャンルごとに本品のようなイラスト作品が数枚ずつ挟み込まれている。イラストレーターには、G.バルビエ、C.マルタン、G.ルバップら人気の作家が参画した。母と子と思われる装いを描いた本品は、アンドレ・ドマン[1883-1962]がボンジョール(ステンシル版画)を用いて制作したもの。それまで長かったスカート丈が短くなり始めた1910年代末のファッションをいち早く大胆に描き出している。ドマンはイラストだけでなく、1922年に家具メーカー「ドミニク」を創業するなど装飾の分野でも活躍した。

一人一品 記者×KCI收藏品

行司 千絵

Chie Gyoji



著名人が各々の目を通し、KCIの収蔵品を語る「一人一品」。
今回のゲストは、新聞記者の行司千絵さんです。

行司さんは、同志社女子大学学芸学部を卒業後、京都新聞社に入社し、記者としてのキャリアをスタートされました。そのかわら、子どもの頃に好きだった洋裁を再開。技術を独学で習得すると、休日にミシンを踏み、自身や母、知人のために服を作るようになりました。これまで作った服は、3〜91歳まで80人余りに290着にのぼります。

制作した服は、個展「母と私の服」（西宮阪急）、「おうちのふく」（フォイルギャラリー）、「まだ見ぬあなたに作った服」（誠光社）などで発表。また、服と自身にまつわるエッセー『おうちのふくー世界で1着の服ー』（2015年、フォイル）、「服のはなし 着たり、縫ったり、考えたり」（2020年、岩波書店）を出版されました。

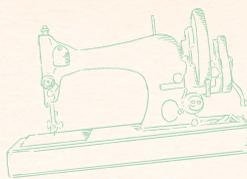
知人の服を作る時、その人に似合う服をイメージしながら色、形、材料を選び、縫い進めていくという行司さん。今回、行司さんが選んだKCIの収蔵品は、18世紀末のドレス「ラウンドガウン」。白い木綿製のワンピース型のドレスです。一針一針縫われたこのドレスを見て、行司さんはどのような印象を持たれたのでしょうか。



『服のはなし 着たり、縫ったり、考えたり』
(2020年、岩波書店)



『おうちのふくー世界で1着の服ー』(2015年、フォイル)



ふぞろいの針目

行司千絵

小学生のころ、日曜日の楽しみは裁縫だった。小花模様のはぎれで人形の服を縫ったり、手提げかばんをつくったりした。

型紙を使うなんて思いもしない。できあがりのイメージに近づけるにはどうすればいいのかだけを考え、だいたいの見当をつけて布をじよまじよまじと切った。

家には家庭用ミシンがあったけれど、どっしりと重厚で大人が使う機械に見えた。わたしは針に木綿糸を通すと、縫いしろを目分量で取りながら、ちくちくと手を動かした。

あのころ刺繍もした。これも下絵を布に描かず、花やお人形を思うがまま刺した。

その後は20年ほど糸と針から遠ざかり、再び持つようになったのは、30歳を過ぎたとき。日曜大工ならぬ日曜洋裁と称して、自分のふだん着を縫うようになった。

家のミシンは長年使わないうちにくたびれてしまい、はじめて自分専用を買った。スイス製のコンピューターミシンで、たくさん種類のステッチ、縫い代に沿ってまっす

ぐに縫える専用リード、ボタンホールやギャザー寄せもできる。頼もしい道具を手に入れたわたしは、**「既製品のような服」**を目指して、せっせと縫った。

そんなころ、この冊子を発行する京都服飾文化研究財団を取材した。

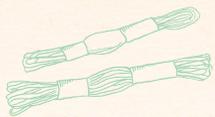
17世紀から現代までの服飾資料1万3千点を収蔵していて、かなり古い時代のドレスもたくさんある。ただ、時間がたつにつれて、布が傷んだり、レースが破れたりしてしまうことから、専門のスタッフが補修しているという。

服の補修に興味を持ったわたしは、スタッフの方々に話を聞いた。さまざま技術や工夫を教えてもらっていると、スタッフのひとりである上山尚子さんが言った。

「ドレスの針目、そろっていないんです。でも、それがとてもいいんです」

針目がそろっていないのは悪いじゃなくて、いい？——
わたしはとまどった。ふだん着ている既製のコートやパンツの縫い目は、ひといきに縫ったかのように端正で、見るだけで気持ちがいい。自分で服を縫うときはいつも、まっすぐに縫う！と唱えている。

ふぞろいのよさって、なんだろう。その意味が知りたくて、わたしは再び京都服飾文化研究財団を訪ねた。





用意してくださったのは、ラウンド・ガウンと呼ばれるドレスだった。

白い木綿の、向こう側が透けて見えるほど薄くて繊細なモスリンで、1795年ごろ、イタリアのかなり裕福な女性が昼の時間にまとった服と、考えられているそうだ。

布一面に草花模様の刺繍。V字に寄せた胸元にはこまかなシャーリング。ハイウエストから裾に向けてはたつぷりとしたギャザー。シンプルなのに優雅さを持つ1着だった。「すべて手縫いなんです。シャーリングもギャザーも刺繍も……」

学芸員の筒井直子さんの言葉に驚いて、思わずシャーリングの部分に顔を近づけて、縫い目を見入った。ひとめ、ひとめ、ミシンのようにそろっていない。たしかに手縫いだ。シャーリングの幅は均一ではなくて、なんとなく合わせた感じ。手首のボタンホールは目の粗い櫛を連想させる形でかがってあった。スカートを裏返してもらおうと、裾には幅が微妙に違う見返しがぐるりと縫い付けられていた。

「こんな縫い方でいいんだ。なんだか、ほっとする」とつぶやいたわたしに、補修スタッフの上山さんが言った。

「アバウトに縫っているように見えますが、マネキンに着せると絶妙な落ち着き方になるんです。裾の見返しも、きつちりとそろえてないのがニュアンスにつながる。補修をしていると、このころの縫い目や生地扱い方に追いつけていないなって思います」

ラウンド・ガウンをつくったお針子さんは、着る人が身にまとったときのことを考えて、針目やシャーリングの幅などを微妙に変えていた。これはとてつもなく難しいこと。ほっとしている場合じゃないと気づいたわたしは、あらためてドレスに目を向けた。複雑なパーツで構成し、袖は袋縫いするなど、精巧につくられていた。

「このニュアンス、今は出せませんよ」と打ち明ける上山さんに、筒井さんが言った。「生地の手持っている風合いを崩さないで縫ったんでしょうね。現代のわたしたちにはわかりにくいかもしれませんが」

手で縫う和裁の世界では今も、生地の風合いや着る人に合った縫い方が息づいているのだろう。いっぽう、既製服にすっかり慣れたわたしは、幼いときとは違って、生地にあった縫い方を考えようとせず、まっすぐな針目だけを意識していた。

京都の料亭でおばんざいのつくりかたを取材したときのことを思い出す。



1800年頃のラウンド・ガウン
N. ハイデロフ『ギャラリー オブ ファッション』(1794-1802)より
京都服飾文化研究財団所蔵



高山崇徳撮影

行司さんが選んだ収蔵品

ドレス（ラウンド・ガウン）

1795年頃 イタリア製
京都服飾文化研究財団所蔵

白い綿モスリンに、紺、茶の綿糸、銀糸で植物模様が刺繍されている。前身頃にシャーリング加工が施され、衿ぐりにレース飾りがつく。ヨーロッパでは、18世紀末のフランス革命を境に社会構造や価値観の転換が起こるなか、ファッションもその姿を大きく変えた。横に大きく張り出したスカートやうず高く結った髪型は影を潜め、身体に緩やかに沿ったシンプルなシルエットのドレスが流行した。ラウンド・ガウンもそのひとつ。それまでのウエスト位置が胸下まで上昇し、ギャザーやシャーリング加工によってゆったりとした仕立てになっている。また、豪華で色彩豊かな絹織物に取って代わったのは、本品のような白い極薄の木綿素材だった。

「きんぴらごぼうをつくるとき、スライサーを使いますか？ 確かに便利ですが、包丁で切ることでごぼうの幅が微妙に違って、おいしいですよ」

縫いするのは、わたしにはまだハードルが高い。でも、ラウンド・ガウンとの出合いを経て、布へのまなざしが変わったことを、ミシンを踏むたびに気づかされている。

② 一人一品



珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫
——そこはまさに「驚異の部屋」。

サンダル 素材：ビニール、プラスチック、ゴム 原産国：アメリカ 製作年：1968年頃

「おうち時間」といえば聞こえがいいが、2020～21年はコロナ禍でいやが応でも家にこもらざるを得ない日々が続いた。「外に出て、植物の緑に癒されたい」。そう思った人も多かっただろう。本品は米国の靴メーカー、ハーバード・レヴィン社が60年代後半に売

り出した「草の中の裸足」という名のサンダル。芝が一時の安らぎを与えてくれるかのようだ。60年代後半の米国といえば、ベトナム戦争や旧体制からの脱却にもがく閉塞感があった時代。状況は違えど、近年と志向が重なる。(筒井)

京都市染色ものがたり ①

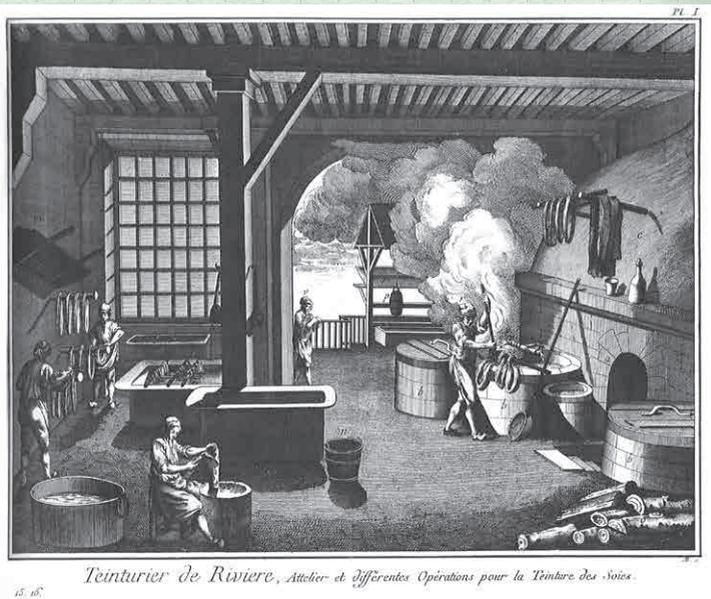


KCI収蔵品

ペチコート（スカート）

1720年頃 イギリス製 京都服飾文化研究財団所蔵 小暮徹撮影

緑の絹タフタに、花鳥や蝶の中国製刺繍をイギリスでアップリケしたペチコート。現在のスカートに相当し、上流階級の女性が身につけた。17～18世紀のヨーロッパにおける中国趣味（シノワズリ）を表した好例。緑は中世より「青春」「歓喜」「若さ」「愛」を象徴する色として貴族階級に好まれた。



Tenturier de Riviere, Atelier et Differentes Operations pour la Teinture des Soies.

15. 66.

18世紀ヨーロッパの染色工房の様子。ディドロ編『百科全書』（1762～72年）より

私たちは色とりどりの服を着る。無彩色の服を着たい日もあるが、それだけではつまらない。有史以来、人々はコミュニティや宗教などの規範が許す限り、色彩豊かな服を欲し、多様な染色の技法を伝えてきた。私たちの服の歴史は、つまるところ色をまとうための飽くなき探求の歴史でもあるのだ。

一万三千点を超える服飾品を保管するKCIの収蔵庫は、そんな色の宝庫だ。赤、青、緑、紫、黄……。棚の扉を開くと、様々な色彩が目飛び込んでくる。なかでも、17世紀から18世紀に作られた衣装がいまだに鮮やかな色を留めているのを見ると、感嘆の声をあげずにはいられない。というのも、合成染料が発明されるおよそ160年前までは、すべて植物や虫などから得られる天然染料で染められていたからだ。それでは、当時の人たちはどのようにしてその色を手に入れる術を身につけたのか？ そそも染色とはどういうメカニズムなのか？ その答えを探るべく、京都市内の大学で教鞭を執りながら染色業を営む青木正明さんにお話を伺うことにした。



青を染める藍の葉。「たで藍」は古くから中国で使用されてきた。(青木正明氏撮影)



たで藍の葉を発酵させて作った染(すくも)。(青木正明氏撮影)



樹木に寄生し、100匹近く群がって死骸の塊になったラク虫。この状態のものを赤色染料として使用する。(青木正明氏撮影)



鳥や蝶、草花の刺繍部分は中国で作られたと考えられている。欠損や退色はあまり見られず、よい保存状態で今日まで残っている。(京都服飾文化研究財団所蔵、小暮徹撮影)

染(すくも)を染液にし、藍を染める。染液から出した直後は茶色だが、空気に触れると次第に酸化し、青になる。(半田太郎氏撮影)

- KCI (以下、K) ..** 本日は、こちらの1720年頃に貴族階級の女性が着たスカートの染色についてお話を伺いたいと思います。
- 青木 (以下、青) ..** すごい！300年経っているんですね。とても綺麗に色が残っていますね。
- K ..** はい、刺繍でできた鳥や蝶、草花も状態よく保たれています。この刺繍は、中国で作られたと考えられています。もとの形は分かりませんが、生地からこの刺繍の部分が切り取られ、イギリスでスカートの文様としてアツプリケ(注1)されたと伝わっているんです。
- 青 ..** 中国趣味、ですね？
- K ..** そうです。17世紀から18世紀にかけてヨーロッパで流行した芸術様式のひとつですね。このスカートが作られた18世紀初頭は、ヨーロッパのなかではイギリスが中国貿易の主導権を握るようになっていましたから、このような刺繍作品もたくさんイギリスに渡り、もてはやされたのでしょうか。清の康熙帝の統治時代「在位1661年〜1722年」ですが、このデザインによく似た蝶や草花の刺繍付き女性用上衣が「康熙朝」の作として北京故宮博物院に残されています。もしかしたら、そのような衣服から刺繍部分が切り取られて、本品に再利用されたのかもしれないですね。
- 青 ..** 極彩色の鳥や蝶、美しい色の豊かなデザインですね。
- K ..** 刺繍部分は中国で染色されたはずですが、染料が何かお分かりになりますか？
- 青 ..** そうですね…。刺繍なので糸を先に染めています。まず、赤は幾種類かの染料が使われていると思います。朱赤の方は、おそらく茜です。そして濃い赤はラク虫(注2)だと思います。青は藍ですね。茶色っぽい部分は丁子かもしれません。中国でよく使われていた染料です。黄色は楊梅(ヤマモモ)でしょうか。中国ではウコンとキハダもよく使用されていましたが、これらはそこそこ退色しやすいので、今、この鮮やかさで残っているとは考え難いです。
- K ..** 退色を加味しつつ、染料を見極めるのは難しいですね。
- 青 ..** はい。科学的に染料を同定する方法はありますが、今のところ非破壊で検査するのは困難なんです。
- K ..** この作品から生地や糸のサンプルを取り出すのは作品保護上、難しいですので、詳細な検査をすることが出来ません。ですので、青木さんのような実践で染色をなさっている方にお伺いするのが最良なんです。
- 青 ..** お役に立てて嬉しいです(笑)
- K ..** スカートの縁はどうでしょう？スカート本体はヨーロッパで染められたと思うのですが、天然染料で鮮やかな緑を染めるのは難しいと聞きます。
- 青 ..** うーん。そうでもないですよ。緑でも方法さえ間違わなければ綺麗に染まります。
- K ..** どのような方法なのでしょう？
- 青 ..** 単独で発色よく緑に染まる天然染料というのはないので、緑を染める場合は青と黄の二色で別々に染めなければなりません。
- K ..** 染める順番は決まっていますか？



青木正明氏プロフィール

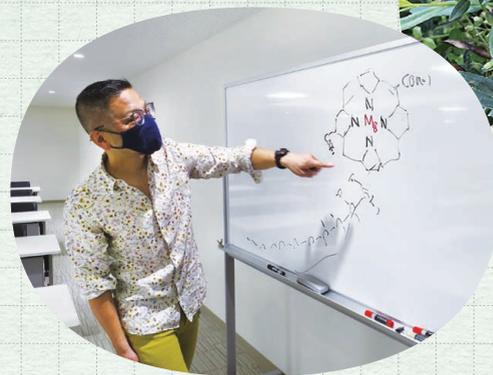
天然色工房 tezomeya 主宰、京都光華女子大学短期大学部准教授兼務、東京大学医学部保健学科を卒業後株式会社ワコールにて企画業務を担当。草木染めを利用した企画に携わる中で天然染料への造詣を深め退社し廣田益久氏に師事。古代染色研究家 前田雨城氏の作品に感銘を受け古代染色研究のため2002年に独立。



染料に樹皮を用いるキハダ。ミカン科の落葉高木で、東アジアに多く自生する。(青木正明氏撮影)

(右) 黄を染めるウイード (モクセイソウ科)。ヨーロッパや西アジアに自生する。(青木正明氏撮影)

(下) 葉緑素の分子構造を解説する青木氏。



青.. 通常は青から先に染めます。その方が明らかに綺麗に染まるんです。というのは、青を染める藍の染液はアルカリ性なんです。そして、黄の染料であるウイード (モクセイソウ科の植物) は黄の色素以外にタンニンが入ってるんです。これがアルカリにさらされると、茶色になってしまうんですね。なので、先に黄を染めてしまうと茶色寄りにふれてしまう。しかし、先に藍を染めるとそれが起こらないんです。

K.. 化学の世界ですね。当時の人はそのメカニズムをとれただけ知っていたのでしょうか？

青.. 記録にはあまり書かれていないんですが、染めをやっている人からすれば「そりゃ、藍から染めるよね。」となります。この作品が作られた頃は、まだ化学の知識が乏しいですから、おそらくそういう経験値だと思います。

K.. おっしゃる通り、染色の歴史を書物で読んでも、いまいち明確なことが書かれていません。先ほど「単独で発色よく緑に染まる天然染料はない」とお聞きしましたが、中世の染色では、緑がスズランの葉で染められていた、という記述を見たことがあります。どう思われますか？

青.. それは難しいんじゃないかな(笑)。葉っぱの緑って見た目はとても綺麗ですが、色素を分子レベルで見たら、とても水に溶けにくい構造をしているんです。葉っぱをコトコト煮込んだら、確かに緑色の水溶液になります。しかし、色素である葉緑素は水の中ではちゃんと溶けているわけではないので、繊維のなかに入っ

ていきにくいのですよ。

K.. それは媒染(注3)をしても難しいんですか？

青.. はい。現在では適度なアルカリ状態で煮出して水に溶けやすくなり銅で媒染をすることで葉緑素を安定的に染める方法が分かかってきていますが、近年までは恐らく難しかっただろう、というのが染色研究者たちの見解です。

K.. そうなんですね。綺麗な色の花びらや葉を見ると、つい美しい染料が取れるのだろうと思ってしまう。

青.. 天然染料のほとんどは、樹皮、心材、根っこで、花びらなどはあまりないんですよ。

K.. 染色の奥深さを感じます。

青.. はい。その探求にすっからはまってしまいました(笑)

K.. 今日は緑の染色を中心にお話をお伺いしました。青木さんには次号でも引き続きご登場頂き、赤の染色についてお聞きしたいと思えます。本日は、どうもありがとうございました。

青.. 次回も楽しみにしています！

(敬称略)

聞き手・筒井直子

注釈

- (1) 土台の生地は別の生地やビーズ、皮革などの材料を重ね、糸を刺して固定する手芸技法。
- (2) ラックカイガラムシ。アジアの熱帯、亜熱帯地域の植物に寄生する。体内に蓄積する赤が繊維製品や食品の染料として用いられる。
- (3) 繊維が染料で直接染まらない場合、鉄やミョウバンといった特定の薬剤で処理して染料を定着させる染色法。

TODAY'S RESTORATION ROOM

今日の補修室

第18回

補修室の七つ道具③



大きなスカートの下には
こんな細工があります！



七つ道具その③ 着せ付け用クリノリン

着せ付け用の
クリノリンはちょうち
んのように縮めることが
できる。この構造も当時と同じ。

Step

03

ドレスを慎重に着せ付け、小物を
コーディネートして出来上がり！



デイ・ドレス
1865年頃 京都服飾文化研究財団所蔵 広川泰士撮影



Step

02

ドレスの大きさに応じてチュール
付きのペチコートを着せ付ける。

Step

01

マネキンに着装すると円すい形に
広がる。弾性の強いワイヤーを用
いて張りを出している。



今回はドレスをマネキンに着せ付けるための
備品の一つである「着せ付け用クリノリン」
を紹介します。

西洋では、1850年代後半からスカートの
シルエットが大きく膨らみ、その膨らみを出
すための下着としてワイヤー入りのクリノリ
ンが発明されました。KCIは当時のクリノリ
ンを何点が所蔵していますが、収蔵品の保
存の観点から、それらを着せ付けのために
使用することが出来ません。そのため、収
蔵品のクリノリンからパターンを取り、シー
チングと鉄のワイヤーを使って、ほぼ同じ形
の「着せ付け用クリノリン」を作りました。

さらに、クリノリンの上に着せるペチコート
、また、チュール付きのペチコートも製作
しました。これらは、それぞれのスカートの
膨らみに応じ、ペチコートの枚数やチュール
の分量の使い分けをしています。

着せ付け備品の中でも一番大きなものに
なり、着せ付ける際は二人がかり、三人が
かりで着せ付けることもあります。大きなシ
ルエットを出すための着せ付け用クリノリン
は、KCI補修室の必須アイテムの一つです。
(伊藤ゆか)



小野原 教子

兵庫県立大学准教授

旭化成(株)で裏地の販促に従事、現職に着任後はヴィクトリア&アルバート博物館やパリ市モード博物館で客員研究員。著書に『闘う衣服』(水声社)、『人を着るということ Mind That Clothes the Body』(見洋書房)、詩集に『表面張力』(思潮社)、『耳から薫』(highmoonoon)、『刺繍の呼吸』(深夜叢書社)がある。

コロナ禍において私生活も仕事も大きく変化した。些細な変化への抵抗とむしろ大きな変化を望む矛盾した感情が生まれ、モヤモヤを抱えたまま日々過ごしている。未来への不安と期待が入り混じり、一つ一つの行動と感情が結びつかないことにストレスを感じている。ところでこの感情、どこか懐かしさもあるなあと。深く考えてみるとそれが「青春」だと気が付く。青春時代、正体不明のモヤモヤを少しでも晴らそうと、ファッション誌

やカルチャー誌を読み漁り、見様見真似で自分を造っていった。装うことで新しい世界が拓けた。25年以上前の話である。コロナ禍における今、社会が混沌としていく中で自分は第2の青春を迎えている。過去、青春にもがき苦しみ、志を築いたつもりではいたが、社会の変化で揺らいでいる。是といったはつきりしたものはないが不安と楽しみが同居している。

六 甲山系の麓に暮らしています。コロナ禍下で散歩が増え、野草を摘むようになり、採集した植物で染めものをしています。この一年半は在宅勤務が基本で、家でゆっくり過ごす時間ができたからです。人間は服を着る動物、衣服と言語のアナロジーをテーマに研究を続けてきましたが、ファッション研究者として転機が訪れたと感じています。ここ数年は仏教僧の身につける「袈裟」を論じていますが、この言葉はサンスクリット語で「濁った

色」を意味します。私生活でははつきりとした色の服を好んできましたが、植物のいのちを糸や布に染め移す作業を通して、認識の変化や新しい感覚が生まれました。あいまいで言葉にできない、分類を越えた、いわば「自然」の色に目が向くようになり、そうすると繊維が前に立ち現れてきたのです。衣服にとって「色」と「素材」は基本要素、原点、いまここに戻ってこれたことに感謝し、前へ進んでいこうと誓いました。



西田 拓志

coromoza 主宰

デザイン、ファッション、製作を生業とした人たちが集まる場所「coromoza」を2013年に創業。新しいデザインのあり方をものづくりの観点から考える場所として現在も運営しています。
<https://za.coromo.jp>

ファッション関係者に聞く、「コロナ禍で考えたこと。これからのこと。」3

コロナ感染症が世界中に拡大し始めてから2年が経とうとしています。そんななかで、ファッション関係者たちは日々、何を考え実践されているのでしょうか。今号では前号に引き続きファッションデザイナーや教育関係、商業関係の方々からお話を伺いました。



「THERIACA 服のかたち/体のかたち」展 2019年

私の発表スタイルはコレクション以外にも本や展覧会だったり幅広く、コロナ中に出版した本がきっかけで私のことを知ってくださる方も増えて、世界的におうち時間が増えたことがマイナスにならなかったのはありがたい。「伝え方」について再度考えるきっかけになりました。

世界が一斉にオンラインに舵を切った現象も興味深く、私も動画で伝える試みをしてみたり、コロナがなかったらやっていたいなかったらうチャレンジや持っていないかったであろうクリエイションにじっくり向き合う時間があったりと、プラスに働いた面もありました。反対にファッションデザイナーとして悲しかったのは、外に出ない、人と会わないということがここまでおしゃれを楽しむ気力を奪ってしまふということでした。普段から心を前向きにする、コミュニケーションのきっかけになる服を作りたいと思っけて活動していますがコロナをきっかけに更にその思いを強くしました。

濱田 明日香

ファッション・デザイナー

ベルリンのファッションレーベル、THERIACA(テリアカ)のデザイナー。ユニークなパターンに定評があり、コレクションの他に本の出版や展覧会などで作品を発表している。著書は「かたちのニット」「甘い服」(文化出版局)、「THERIACA 服のかたち/体のかたち」(torch press)他、多数。



web
www.theriaca.org



Instagram
@_theriaca_



「Sofa」2018年 photo by Kin Mizuki

展覧会開催

「ドレス・コード? —着る人たちのゲーム」展 ドイツ展が開催されました

京都服飾文化研究財団が三館と共催した「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」展（京都国立近代美術館：2019年8月10日～10月14日／熊本市現代美術館：2019年12月8日～2020年2月23日／東京オペラシティ アートギャラリー：2020年7月4日～8月30日）が、2021年5月、ドイツ・ボン市の国立美術館「ブンデスクンストハレ/ドイツ連邦共和国美術展示館」に巡回しました。新型コロナウイルスの感染状況が続く中であって約3万3千人の観覧者を集め、同年9月、無事閉幕いたしました。同展開催にあたり、関係者の皆様には多大なるご尽力を賜りましたこと、心より厚く御礼申し上げます。



展覧会概要

DRESS CODE: DAS SPIEL MIT DER MODE (独)
DRESS CODE: Are You Playing Fashion? (英)

会場 Bundeskunsthalle
(ブンデスクンストハレ/ドイツ連邦共和国美術展示館)
Museumsmeile Bonn, Helmut-Kohl-Allee 4, 53113 Bonn, Germany

会期 2021年5月21日(金)～9月12日(日) *5月21日、22日は臨時休館

主催 ブンデスクンストハレ、京都国立近代美術館、
公益財団法人 京都服飾文化研究財団

Dress Code: Are You Playing Fashion? Photo: Laurin Schmid, 2021
© Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland GmbH

服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第18号
2021年12月17日発行

—

発行

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI)
〒600-8864
京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
株式会社ワコール京都ビル内
電話：075-321-9221
ウェブサイト：<https://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城（京都服飾文化研究財団）
デザイン：坂田佐武郎、福川真由子（Neki inc.）
写真：成田舞（Neki inc.）

編集後記

上記のとおり、KCIが企画する大規模な展覧会は終了しましたが、KCIの収蔵品は国内の様々な展覧会でご覧いただけます。以下の展覧会に収蔵品を貸出し展示していますので、ぜひお運びください。

● 上野リチ：ウィーンからきたデザイン・ファンタジー

会場 京都国立近代美術館
会期 2021年11月16日(火)～2022年1月16日(日) * 休館日あり
※同展は2022年2月18日(金)より三菱一号館美術館(東京)へ巡回予定

● 奇想のモード 装うことへの狂気、またはシュルレアリスム

会場 東京都庭園美術館
会期 2022年1月15日(土)～2022年4月10日(日) * 休館日あり